

2023年度 学校評価（自己評価）報告書

|      |                   | 評価単位             | 評価のまとめ                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|------|-------------------|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 教育課程 | 教育課程              | 1. 教育目標          | ・教育目標である「子どもへの願い」を、年度初めに保護者と共有し、学期ごとの保護者会や研究便りを通して、その都度、確認し、共通理解を図ってきたことで、子どもを中心におき、保護者と連携しながらその育ちを支えていく体制作りにつながった。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|      |                   | 2. 教育課程の編成       | ・「子どもへの願い」をもとに、「自分」「ひと」「もの・こと」との関わりを軸においた教育課程と、入園前後、及び小学校入学前後を意識においた「接続期カリキュラム」があることで、子どもの育ちの連続性を意識に置いた保育内容や教師の関わりについて、より丁寧につなげることが可能になった。<br>・日々の対話型マップ記録、写真記録(保護者向け)、翌週の週案、学期ごとの「遊びと生活の履歴」と、記録作成の過程が整理され、保育を省察し、次へと見通しをもって保育を実施していく体制が定着してきた。<br>・今年度の研究テーマである「つくるが生まれる暮らし」に照らした保育実践の省察は進んだが、教育課程に立ち返り、その内容をさらに深めていくまでには至らず、今後の課題である。<br>・対話型マップ記録は、他教師との保育観のすりあわせや共通理解に役立っているが、他学年との共有方法についてなど、改めて振り返る必要がある。                                                                                                                                                                                                                                                 |
|      |                   | 3. 年間保育日数<br>・時数 | ・年度当初の分散登園は、子ども一人一人と丁寧に関わることができ、安心して園生活を始める上で有意義であったため、今年度も継続した。<br>・園児の体力や家庭での過ごし方等を考慮した上で、4・5歳児の週の回数を増やしたことは、園児の園生活の充実につながった。<br>・コロナ禍以前の生活に戻すべく、これまで他学年を休園としていた行事の見直しを図り、全学年の保育時間の確保に努めた。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|      |                   | 4. 教育活動とその成果     | ・「ひと」「もの」「こと」に着目し、園児の遊びや生活の姿を見取り、省察していくことで、異年齢のつながりが見え、3歳児から5歳児が関わり合って育っていく過程に丁寧に関わっていくとする教師の意識向上につながった。<br>・非常勤講師を交えた拡大打合会を定期的に実施することで、異学年の様子や教師一人一人の思いや考えが共有でき、連携体制を深め、見通しをもった保育計画や環境構成を遂行することができた。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|      |                   | 5. 行事            | ・もちつきの実施、誕生会への全員参加など、コロナ禍以前の生活に戻しつつ、行事の内容や持ち方などについては、改めて検討し、子どもたちにも保護者にも無理なく実施できるよう配慮した。<br>・郊外園での芋掘りや大根掘りでは、収穫物をその場で調理し、親子で味わう機会をもつことができ、有意義であった。大根については、今年度も生育状況より当初の予定から変更せざるを得なくなった。2年続いていることなので、来年度は日程についてより丁寧な吟味が必要である。<br>・学期ごとに振り返りを行うことで、一つ一つの行事の持ち方や時期などの検討に加え、翌年の年間行事予定への見直しにつながっている。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|      |                   | 6. 進路指導          | ・年長児一人一人の育ちを教師全員で共有し、把握していくことで、小学校へとなめらかに接続していけるよう連携して保育に当たる体制作りは構築されてきているが、資料作成など、年長組担任の負担はやはり大きい。引き続き、仕事量の分担など協力体制については検討の余地がある。<br>・説明会や個人面談などにより、進路選択に幅があることや、多様であってよいことを伝え、子どもたち一人一人に即した進路のありようを保護者と一緒に考えていくことができるよう努めた。<br>・引き続き、幼小連絡進学の現制度では困難さを伴う点が大きく、内規の見直しなど、今後のありようは検討の必要がある。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|      |                   | 7. 研究・研修         | ・今年度より園内での研究テーマを「つくるが生まれる暮らし」とし、「つくる」「暮らし」などをキーワードに、日々の子どもの姿をみつめ、事例の省察を試みた。話し合いの中で、昨年度課題にあがっていた、「保育者の関わり」、特に「身体性」に視点を置いた考察の必要性を感じ、検討を重ねている。<br>・公益財団法人前川財団の「家庭教育研究及び実践活動助成」を受け、「対話による保育記録の成果と課題」についての研究を引き続き実施した。研究の一環として、今年度は、環太平洋乳幼児教育学会にて発表した。<br>・2月に公開保育研究会を実施。昨年度の実施内容が参観者から好評であったこともあり、今年度も研究発表はオンデマンド開催とした。当日は、参加人数を限定しての公開保育を実施。学年別協議会では対話を重視した。全体会では、昨年に引き続き、本学の宮里曉美教授の進行のもと、各園での情報交換、学年別協議会での内容の共有、研究テーマにつながる話し合いなど、カフェスタイルでの有意義な討議の時間となった。<br>・学内の「三園合同研究会(対面)」は実施できたものの、文京区の幼稚園との交流、研究会の実施は滞り、研究の地域への発信が今後の課題である。<br>・日本保育学会では、自主シンポジウムや口頭発表によって、本園の保育内容や保育記録の工夫について、その発信に努めた。<br>・他園(大阪・軽井沢など)への参観などを通し、各保育施設での保育内容や保育環境、記録の取り方の工夫などを知り、学びにつながった。 |
| A    | 学校運営（教育課程を支える諸条件） | 1. 経営・組織         | ・勤務分掌は、少ない職員体制のもとで各人が責任をもって執行しているが、情報の共有についてはまだまだ工夫の余地がある。職員全体で共有していく工夫を検討したい。<br>・勤怠管理システムの活用により、出勤・退勤時間の記録、残業申請や有給申請を効率的に行えるようになった。<br>・年度途中での職員の休職により、任期付き教諭が担任業務を行うことになった。勤務時間に制限がある中での仕事となりやや負担が大きかった。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|      |                   | 2. 出納・経理         | ・預かり金の運用については、様々な変革に伴い、その都度の対応を余儀なくされたが、教師間での協力体制のもと、計画的に運用することが出来た。学生納付金・運営基金についても、残高の確認を頻繁に行い、全教師に共有しつつ適正な運用に努めた。<br>・常勤の事務職員が不在なため、担当教師の負担が大きいのは引き続きの課題である。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|      |                   | 3. 施設・設備         | ・樹木の剪定により、園庭の見通しがよくなり、子どもが好んで遊ぶ空間が広がったが、斜面からの土砂流れなど課題もある。園庭環境については、長期的な見通しをもって検討していく必要がある。<br>・園舎内の木製家具の修理や塗り直しを引き続き実施。園環境の美化につながり、モノを大切に扱う意識の育ちが見られる。また、夏休みを利用し、卒業生を対象に木製家具や遊具の手入れを実施した。次年度以降も引き続き実施していきたい。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|      |                   | 4. 健康            | ・スクールカウンセラーとの連携は、保護者のみならず、保育者の安心にもつながっているが、さらに保護者が相談しやすい工夫が必要である。<br>・巡回指導については、特別支援という視点に狭めず、広く幼児の育ちについて考えていく機会となるよう、連携の在り方を検討したい。<br>・園内感染についての対応については、今後も安心できる保育環境の保持、教職員の健康管理について、引き続き真摯な取り組みを目指す。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|      |                   | 5. 安全            | ・園内の環境面については、気付いたことを伝え合うよう努め、その都度、施設課に対応を依頼するなどして安全確保に努めた。安全点検の定期的な実施がなかなか徹底できず、やり方など再度検討の余地がある。<br>・避難訓練は園児の育ちに則した内容にし、計画的に進めていった。集団行動時の個々の行動の様子を把握しつつ、園児の安全確保を図りつつ、安心して取り組めるよう努めた。回数を重ねていくことで、園児も状況を察知し、指示をよく聞いて、適正な行動をとれるようになってきている。<br>・登降園時の園児の受け入れや引き渡しについては、園児のみならず、保護者の安心につながるよう、より丁寧に対応できるよう配慮したい。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|      |                   | 6. 情報            | ・大学主催の研修を受けることで、情報管理の重要性を確認でき、情報管理に対する意識向上につながっている。<br>・ホームページを随時更新するとともに、必要に応じて見やすく整理することで、必要とされる情報が正確に発信されるよう努めた。<br>・今後のICTを活用した取り組みの推進を見直し、園内のWi-Fi環境を整えていきたい。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|      |                   | 7. 開かれた学校        | ・教育課程や研究便り、各月のお知らせ、週の写真記録などにより、園の教育内容や園児の様子を保護者にわかりやすく発信することに努めた。<br>・学校関係者評価委員会での意見を受け、保護者アンケートを今年度よりWEBでの実施としたところ、例年より高い回答率を得、忌憚のない意見をいただくことができた。<br>・同窓会関係の催しについては、持ち方を工夫し、春のホームカミングデイも夏のボランティアデイも実施することができた。<br>・公開保育研究会を2月に実施。研究内容について事前に配信したことで、それを踏まえた上で、実際の保育を参観していただくことが出来、対話の時間を充分に確保することにつながった。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|      |                   | 8. 入園検定          | ・対面での説明会を実施し、ホームページと合わせて情報公開した。<br>・WEBの導入から3年目となり、保護者からの問い合わせも減り、スムーズな運用ができた。一方、検定内容は夏休み前にも、検討、決定していくことの必要性が明らかになった。<br>・昨年、休日に行った一次検定を平日の午後に実施。保育日数を減らすことなく、かつ、教員の休日出勤もせずに実施できた。また、三次検定も立会人制度を導入したWEBでの実施に変えたことで、受検者の負担を減らすことにつながった。<br>・判定基準等、内容については、さらに検討を重ねていく。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |

|   |        |                  |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|---|--------|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|   |        | 9. 保護者との連携       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・写真記録のファイルは、子どもの様子や生活の流れを理解するよい機会になっていると、引き続き、保護者からの賛同を得たが、付箋紙でのやりとりは、参加する保護者にやや偏りがある。保護者との対話的関係作りのための多様な方法を探していきたい。</li> <li>・教師との和やかな関係、園児同士のトラブルやけがの対応についての経緯、子どもへの接し方に関する教師の考えなどを知りたいと望む保護者の声が多い。保護者が安心できる園の雰囲気作りの工夫が必要である。</li> <li>・誕生会後の副園長との懇談(ホットモタイム)は、学年を超えた保護者同士の対話の時間として位置付けてきた。ここでの対話の内容がすぐに教師に共有されることで、子どもの家庭での様子や保護者の悩みを知ることができ、保護者との信頼関係につながっている。</li> <li>・3学期の親子で遊ぶ日を、他学年の降園後の実施とし、親子で弁当を食べる時間を設けたことは、園児の昼食時の様子を知る機会となったようで保護者から好評を得た。</li> </ul>                             |
| B | 大学との連携 | 1. 連携研究          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・幼小接続部会では、小学校1年生のサークルタイムを参観。園での集まりの時間の持ち方についても工夫できそうな点が見られ、学びにつながった。</li> <li>・エシカル部会では、幼稚園から大学までが協働し、エシカルアクションを意識においた交流活動に引き続き取り組んだ。今年度はおにぎりアクションについて、小学5年生が説明にきてくれ、各家庭で無理のないところでの参加とした。</li> <li>・コンビテンシー育成開発研究の一環で、中学生と5歳児との交流活動を今年度も実施。園の収穫物をお裾分けしたり、中学校で作った梅干しを分けてもらったりなど、行き来を重ねた。</li> <li>・フードドライブ活動にも引き続き、幼稚園から大学までが協働して取り組んだ。一斉開催ではなかったが、幼稚園では、在園児の保護者と本学の学部生とで、集まった食品の集計などを担当したことで、連携が図れた。</li> <li>・学内のナースリー、こども園との三園合同研究会では、乳幼児期の子どもへの理解を深める機会となり、保育を多角的視点から振り返る時間になっている。</li> </ul> |
|   |        | 2. 授業交流          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども学フィールドワーク、教職実践演習、公認心理師実習などの幼稚園観察実習を受け入れた。その都度、学生及び指導教官からの観察記録を共有することで、日々の保育を新たな視点で見る機会となり、本園にとっての学びにもつながった。</li> <li>・連携研究の一環で小学校の授業を参観したり、小・中学校との交流活動を実施することは、子どもたちの育ちや経験のつながりを意識する貴重な経験になった。</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|   |        | 3. 教育実習          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・伝えるだけではなく、一緒に行うことで作業の意味や流れを指導していくよう努めた。</li> <li>・保育、行事、教材研究など、多様な経験や学びが得られるよう、実習内容を工夫し、省察を丁寧に行いながら、学びが深まっていくよう指導した。</li> <li>・実習日誌については、実習生の負担を考慮し、ワード作成も可とした。指導する側にとっても読みやすく、指導しやすくなった。</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|   |        | 4. 専門委員会         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年に引き続き、職員会議で、各専門委員会での議事録を共有し、検討内容等、共通理解を図った。</li> <li>・他附属校との情報交換を丁寧に行い、園内で共有してから検討していくことで、スムーズな連携が行われるよう努めた。</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|   |        | 5. 大学の講義担当       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・保育内容指導法「表現」に加え、「ことば」も園の教師が担当することになった。授業の内容については、いずれも、学生自らが思考し、学生同士の対話を通して、学びを深めていくことに重点を置いた。後期の授業は入園検定や行事と重なることが多く、負担がやや大きいのが課題であるが、学生とともに、保育を多角的に捉える機会ともなり、教師側の学びも大きい。</li> <li>・家庭看護学は、4附属で連携しつつ、授業内容の充実を図った。</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|   |        | 6. インターンシップ      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度のインターンシップは希望者がなく実施されなかった。中高のインターンシップの学生の保育観察を受け入れた。</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|   | 社会貢献   | 1. 参観・研修受け入れ     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・国内外の参観者を数多く受け入れた。様々な園や海外の幼児教育に触れる貴重な機会となった。</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|   |        | 2. 公開研究会開催       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・昨年同様、申込みやアンケートはWEBで対応。研究発表はオンデマンド配信としたため、参観者との対話の時間が確保できた。保育後は、本園の研究テーマである「つくるが生まれる暮らし」を視点に、参観者同士の語り合いを通して、子ども理解を深めていく時間となり、有意義であった。</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|   |        | 3. 現職研修          | 本年度は該当項目なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|   |        | 4. 途上国支援         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・JICAの参観を再開した。年長児がダンスを披露すると、現地の歌のプレゼントがあり、豊かな交流の時間をもった。外国の文化を知る貴重な機会となった。</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|   |        | 5. 出版活動          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「保育手帖その1・その2・その3」と3冊発行することができ、入園前の保護者に配布した。保護者の悩みや戸惑いに共感しつつ、園生活への見通しがもてる内容だと好評を得ている。</li> <li>・「つくるが生まれる暮らし」をテーマにした今年度の研究について紀要にまとめ、発信する予定である。「身体性」をキーワードに、子どもの表現を身体を通して受けとめ、応答的に関わる教師の関わり方を丁寧に考察した内容にしたいと考えている。</li> <li>・『幼児の教育』(プレーベル館)において、外国訪問研修の成果についての記録や、本園の保育の日常について、わかりやすく発信することに努めた。</li> </ul>                                                                                                                                                                                      |
|   |        | 6. 各種研究会等への協力・支援 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・オンラインによる研究会への各教師の主体的な参加に加え、創立記念のための休園日を活用し、他の幼児施設などを視察した。</li> <li>・奈良県大和郡山市の保育者の研修会において、公開園内研究会の要請を受け、本園の園内研究のありようをオンラインで提供した。</li> <li>・文部科学省に要請を受け、幼保小接続期の理解増進事業に協力し、事例提供や出版物の発行に携わった。</li> <li>・「のびのび子育てサロン」を大学と三園で協力して年2回開催し、地域の子育て支援に貢献した。</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                     |
|   |        | 7. その他           | <ul style="list-style-type: none"> <li>・園庭の石の滑り台とその周辺の補修工事を実施。また、保育室の机・椅子の補修も引き続き行った。</li> <li>・創立150周年に向けて、歴史資料から学ぶ機会を設けていきたい。</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |

2023年度 学校評価(自己評価)まとめ (・成果と＊課題)

<教育課程>

・教育目標(子どもへの願い)に基づいた教育課程は、年度当初に保護者と共有し、その後も保護者会等において、その都度、共通理解を深めていくことで、子ども理解や保育内容の充実につながるものになってきている。

・学内のこども園、いずみナースリーとの三園合同研究会は、子どもの育ちの連続性を意識におき子ども理解を深める対話の場となっている。

＊今年度の研究テーマ「つくるが生まれる暮らし」を視点に、教育課程の内容を見直し、修正を重ねていく。

<園運営>

・園庭遊具の新調、樹木の剪定、園舎内の木製備品等の修理・改善など、運営基金を有効に活用することで園環境の整備を図った。

・コロナが第5類となり、日常の保育に戻すよう努めた。再開した行事は、内容や持ち方について、子どもたちや保護者が無理なく楽しめるよう改善を図った。

＊保護者が安心して悩みや戸惑いを相談できる園の体制作りに努め、子どもを中心に園と家庭とが横並びで子どもの育ちを支える対話的な関係作りがなされるよう引き続き配慮する。

<大学との連携>

・大学の講義や、観察実習の場として、積極的に協力し、学生の実践的な教育に役立てるよう貢献した。

＊大学と連携し、学生の学びやすさに配慮しながら、現場として必要なこと、大切なことなど、学びの質を保障した指導ができるよう取り組んでいく。

<社会貢献>

・各地域の研究会への協力、文科省による幼保小接続期の理解増進事業に協力した事例提供、公開保育研究会のオンラインによる研究内容の提案、対面開催による保育の公開等により、本園の教育理念や研究について積極的な発信に努めた。

＊さまざまな園や施設との交流をはかり、互恵性のある学び合いを推進していく。

＊引き続き、保育に支障のない範囲内で、国内外の参観者を受け入れることで、日本の保育の特徴を発信し続けるのと同時に、子どもたちにとっても異文化に触れ、学ぶ機会となるよう努めていく。